輝ける星

CHE.R.RY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
輝ける星

【Ｎコード】
Ｎ０１１６Ｅ

【作者名】
ＣＨＥ．Ｒ．ＲＹ

【あらすじ】
●カプリングはコ哀です●今は運営していないホムペから引っ張って来ました。ちょっと修正してますがストーリーはそのままです●この話はある曲をイメージして書いた物です。●カプリングが許せない方はＢＡＣＫお願いします。

輝ける星～Ｂｏｙ～

いつからだっけ？

アイツの事がこんなにも気になり出したのは。

気付いたらいつも目で追ってた。

アイツの事すげぇ好きになってた。

そしてアイツが隣にいる事が当たり前になってる。

＊＊＊＊＊＊

「どうだ？」

「綺麗…」

「だろ？この前見つけて絶対、灰原に見せたかったんだ」

「……有り難う」

俺は灰原を連れ出し（人はこれを無理矢理と言うかもしれないが、俺が違うと言ったら違う）、小高い丘まで来た。

「都会でも、こんな星空が見れるんだぜ？」

「綺麗ね…」

「来てよかっただろ？」

「…そうね」

そう言った灰原の横顔が何よりも綺麗だった。

…なんて思った事は内緒だけどな。

「…欲しい物ねーか？」

「え？」

「だってさ、お前誕生日も教えてくれねーし、一回も何もしてやってねぇからさ…いろいろ感謝してるし」

「何言っているのよ。私の方が貴方に感謝してるわよ」

「いいんだよ。俺がオメーに何かしたいんだ」

「……変な人。なら…」

コイツの事だから高ェブランドのバッグとか言うんだろーな…。

ま、承知の上だけどな。

「あの星」

灰原が指す空には1番輝く星があった。

…あの星をくれってか…んな無茶な。

「…なぁ灰原」

「なにかしら」

「俺…灰原が好きだ」

「何バカな事言ってるの」

「だって本当の事だし」

「面白くないんだけど？」

「冗談じゃないんですけど？」

「頭おかしいんじゃないの？」

「いたって正常ですが？」

「だったら何だって言うのよ。意味が分からないわ」

「これからもずっと俺の1番近くにいてくれ」

「嫌よ。貴方、毛利さんがいるじゃない」

「だから…今俺が好きなのは灰原だし、この先傍にいて欲しいのもオメーだ」

「……何バカな事言っているのよ」

「バカバカ言われても…」

「……あの星をくれたらね」

「…あの星って…」

灰原は楽しそうに1番輝いてる星を見つめて言った。

無理なの分かってて、反応見て楽しんでやがる…。

ったく…。

…—僕を困らせる事ばかり言う君でもズット愛しているよ—…

.

輝ける星～Ｇｉｒｌ～

私の気持ち。

嘘つきな気持ち。

秘密な気持ち。

一生叶わない願いだから何も望まないわ。

ただ今この瞬間を胸に焼き付ける…。

＊＊＊＊＊＊

「どうだ？」

「綺麗…」

「だろ？この前見つけて絶対、灰原に見せたかったんだ」

「……有り難う」

工藤君に無理矢理連れ出されて来たのは小高い丘。空には吸い込まれそうなくらいの星が散らばっていた。

「都会でも、こんな星空が見れるんだぜ？」

「綺麗ね…」

「来てよかっただろ？」

「…そうね」

貴方となら、何を見ても綺麗だと思えるわ。

…なんて思った事は内緒だけどね。

「…欲しい物ねーか？」

「え？」

「だってさ、お前誕生日も教えてくれねーし、一回も何もしてやってねぇからさ…いろいろ感謝してるし」

「何言っているのよ。私の方が貴方に感謝してるわよ」

「いいんだよ。俺がオメーに何かしたいんだ」

「……変な人。なら…」

いきなり変な事を唐突もなく言い出すから、少し戸惑った。

だから…

「あの星」

そう言ってしまった。

どうひっくり返っても無理なのにね。…無理だから言ったのかもしれない。

だって私は…貴方が居てくれれば何も要らないもの……なんてね。

「…なぁ灰原」

「なにかしら」

「俺…灰原が好きだ」

「何バカな事言ってるの」

「だって本当の事だし」

「面白くないんだけど？」

「冗談じゃないんですけど？」

「頭おかしいんじゃないの？」

「いたって正常ですが？」

「だったら何だって言うのよ。意味が分からないわ」

「これからもずっと俺の1番近くにいてくれ」

「嫌よ。貴方、毛利さんがいるじゃない」

「だから…今俺が好きなのは灰原だし、この先傍にいて欲しいのもオメーだ」

「……何バカな事言っているのよ」

「バカバカ言われても…」

どうして嬉しくなるのかしら。叶わないのに。叶っちゃいけないのに。

私は疫病神だから。私は居ちゃいけない人間だから。

でも、この気持ちは止められないの…。だから…

「……あの星をくれたらね」

「…あの星って…」

そう言ったの。叶っちゃいけないから。私は幸せになっちゃいけないから。

幸せになるのが怖いから。

だけど…知らないでしょ？

…—真っ直ぐ見つめてる貴方の瞳(め)は探し続けてた私だけの輝ける星

—…

.

輝ける星

コナンの告白から数週間が経った。哀は未だに素直になれずにいた。

それでもコナンは毎日のように阿笠宅に来ていた。

「灰原ーいるかー？」

「新一、来たのかね。哀君なら地下室じゃよ」

「お～博士。さんきゅー」

「…そうじゃ新一。今朝から哀君の様子が変なんじゃ…少し暗いと言うかのぅ…力になってやってくれんかのぅ」

「ああ。任せとけ」

博士がコナンにそう告げるとコナンは階段を降りて地下室に行った。

――コンコン

コナンは数回ドアをノックしてからノブを回して中に入った。

「灰原？」

「……何かしら」

「返事くらいしろよ」

「返事をしてもしなくても一緒でしょ？どうせ入ってくるんだから」

いつもより口調の弱い哀にコナンは肩を竦めた。

「何かあったか？博士、心配してたぞ」

「別に？何もないわ」

「何だよ。言えって。俺のしつこさ知ってんだろ？」

「ええ。…本当によくもまぁ毎日飽きもせずにご苦労様ね」

そう言って哀はコナンに背を向けた。

コナンはフゥ、と息をついてから口を開いた。

「……今日、だよな。明美さんの命日」

「――――ッどうしっ…」

コナンの言葉に哀は勢いよく振り向いた。

そして言葉を失った。

そこに立っていたコナンの表情は、穏やかででも苦しそうだったからだ。

哀の悲しみはコナンの悲しい笑顔に消えていった。

「オメーの顔をみりゃわかるさ…オメーがそんな顔する時は明美さんの事を考えてる時だ…。ごめんな、灰原…俺のせいで明美さんは……」

「違う！！貴方のせいじゃないわ…！！」

「でも、助けられなかったんだよ俺は…」

「…仕方ないのよ。お姉ちゃんの運命だったの。貴方が責任感じる事なんて何もないわ」

哀はそう呟き目を伏せた。

「…寂しいのよ」

そしてポツリと呟いた。その言葉にコナンは聞き返した。

「え？」

「お姉ちゃんが死んでしまった事は確かに今でも泣いてしまうくらい悲しいけど……違うの。寂しいのよ……お姉ちゃんが…いなくな

った夜は…。怖いの…」

哀は消えそうな顔でポツリポツリ話した。そんな哀にコナンは腕を伸ばして、その腕の中に閉じ込めた。

「くどっ…！？」

「…寂しいなら俺が傍にいる。俺がずっと抱きしめてやるから…俺の温もり感じてろよ。俺もオメーの温もり抱きしめるからさ…二人で乗り越えよう…」

「…工藤…君…」

「…夜、また星を見に行こうぜ？明美さんの星、探しに行こう」

「……あるのかしら」

「あるよ、絶対」

そして夜。コナンと哀はあの場所に行った。

その夜も溢れんばかりの星が夜空に広がっていた。

「あれ絶対明美さんの星だぜ」

コナンは一つの一段と輝いている星を指した。

「どうして？」

「そんな気がすっから」

「本当、適当なんだから」

「なぁ、すげぇと思わねぇか？」

「なにが？」

「この星の数程の人の中で灰原と俺が出会えた奇跡」

「相変わらずキザなのね」

その時、一つ星が流れたのを合図にいくつもの星が流れだした。

「流星群…？」

哀は思わず息を呑んだ。…あぁ、双子座流星群ね、とコナンに行った。

「みたいだな。これは予想外だぜ。…そういや最近テレビで言ってたかも」

こんな偶然、すげぇよな！とコナンは哀に笑いかけた。哀も口元を少し上げた。

それから二人は暫く黙って流れていく星を見ていた。

「願い事、言わなくていいのか？」

「あら、貴方そんな事信じているの？」

「…たまにはいいじゃねーかよ、そういうのも」

「…そうね。隕石が大気圏で燃えてるだけのものに願いをかけるのも悪くないかもね？」

「…オメーも、相変わらず可愛くねぇ事言うな」

哀とコナンはクスリと笑いまた流星群を見つめた。

そのうち哀の心が変化した。胸の中の迷いが解けていった。

星が降るこの街に二人でいたい、と言う二人の気持ちが重なった。

「…これからもずっと一緒にいたいな」

「そうね。…あの星をくれたら、ね」

哀の答えはいつも一緒。だけどコナンには伝わっていた。今度の言葉は受け止めてくれたのだと。

コナンは哀を引き寄せて強く抱きしめた。

「好きだ」

「ええ」

「…灰原は？」

「聞きたいの？」

「あたりめーだろ」

「後悔してもしらないわよ？」

「しねーよ」

「…私も、貴方が好きよ」

「…うん」

コナンは哀から身体を離してその瞳を見つめた。

「…キスしていいか？」

「あら、そんな事を聞くのは野暮なんじゃないかしら？」

哀がそう言うとコナンは迷わずにその唇に触れた。

ゆっくり時間をかけるように何度も角度を変えながら――…。

（星はやれねぇけど…変わりに俺の愛を全てあげるから。ずっとずっと一緒にいよう…。どんなに周りが変わっても、地球は変わり続けるけど…俺の気持ちは変わらないから。お前の悲しみを無くしてみせる、この気持ちだけは…絶対）

（星は貰えないけど…変わりに貴方の愛でも貰っておくわ。…きっと何よりも欲しかったものだから。おもいっきり大きな愛で包んで、私は受け止めるから…絶対）

■おわり■

おまけ：イメージソングの歌詞&後書き（本文ではありません）

『輝ける星』
作詞作曲：小松未歩

いつも交わしてきた
「この先もずっといたいな」
答えはいつも一緒
「あの星をくれたらね」

はにかんだ貴方の横顔に
少しだけこの距離感
感じてるけれど

「僕を困らせる事ばかり言う君でもずっと愛しているよ」
真っ直ぐ見つめてる
貴方の瞳(め)は
探し続けてた　私だけの
輝ける星

振り返ればいつも
穏やかな貴方がいて
悲しい出来事も

その笑顔に消えてく

この胸の迷いがとけてゆく
星が降るこの街で二人
暮らしていきたい

淋しい夜もこれからは
お互いの温もり抱きしめ
乗り越えよう
変わり続ける地球の片隅で
変わらぬ夢を永遠に
輝かせよう

夜空に散らばる幾千粒の
星の中で巡り会う奇跡
おもいっきり大きな愛で
包んで　受け止めるから
絶対

「僕を困らせる事ばかり言う君でもずっと愛しているよ」
真っ直ぐ見つめてる
貴方の瞳(め)は
探し続けてた　私だけの
輝ける星.

――以上です。

本文に書く事じゃないですがすいません。

文字数が足らないので書かせていただきます！

えーっと。何年前に書いた奴なんだろう…全然思い出せないくらい前ですが…

未だに放置しているサイトから引っ張ってきました（笑）文章が意味不明やったのでチョコチョコと手を加えて修正しましたが、話が変わった、と言う事はありませんね！

え？文章意味不明なの変わってないって？…それは言わない約束じゃないっすか～（誰だよ）もう、これがＣＨＥ．Ｒ．ＲＹの精一杯だからホント許して！！！

…え？許せない？んーそれは参った！！どうにもできないですね。

まあ…許せない方は今後ＣＨＥ．Ｒ．ＲＹの駄作は見ない方が得策ですね！

この話は短編として出したかったのですが、短編としては長すぎた

ので中編という気持ちで出しました！！

これからも短編を出したり今連載中の『切ないくらい。』も完結に向けて出したいと思ってます！！

付き合いきれる方、またお会いしましょ～う（＾Ｖ＾）

では、本文に後書き書いてすいませんでした！…でもこれで文字数足りたかな！足りてんかったら笑いますよコノヤロー！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0116e/

輝ける星

2010年10月15日17時28分発行